今年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大のため、様々な行事を中止せざるを得ない状況であったり、規模を縮小して開催したりと、十分な活動が行えなかったと感じる年でした。

○2月に計画されていました、安西小学校５年生・安西幼稚園・ひまわりやすにし保育園との触れ合いは、コロナ禍の中、中止となりました。大事な楽しい経験ができなくなるのは残念ですね。

○16日の人形劇「ぺぽ」は全員が１度にホールで鑑賞すれば、大人数になります。
そのため、２回公演をお願いいたしました。

１回目 10:00～　ひよこ、ちゅうりっぷ、たんぽぽ

２回目 10:40頃～　すみれ、ひまわり、ゆり

間隔をあけて座り、楽しみたいと思います。

○卒園式　３月13日（土）　ゆり組とゆり組保護者、職員が参加します。
間隔を開けて、密にならない方法を考えていきます。

○歯科検診　毎年２月に実施していますが、今年度は嘱託医の加島先生の助言もあり、様子を見ることとしました。３月に入り、新型コロナウイルス感染症の発症人数が落ち着いた様子が見えたら、検討していきます。

○2月15日～26日まで保育実習生が3名、ひまわりやすにし保育園で実習を行います。
どのクラスにも入ります。
温かく見守ってくださいね。

読み聞かせ　心の動きを　感じ取って　≪広島の絵本講師　高橋美保さん≫

「リアクションがなくても、子どもは思い切り楽しんでいるんですよ」文章の内容に気をとられる大人とは違い、子どもは絵を「読む」ほどに見ているという。脇役や背景の風景の変化にも目を凝らす。色使いやタッチから登場人物の心情を感じる子もいるという。親の声のトーンを心地よく感じていることもある。「声を出して笑うというわかりやすい反応をしなくても、刺激を受けて心をしっかり動かしている可能性は十分ある」と話す。

同じ本ばかり読んで欲しがることもある。家でさんざん読んだ本をわざわざ保育園などから借りる子もいる。「親は『また、これ』と非難しがちです。でも、ちゃんと理由があるんです」幼い子どもは、世の中には知らないものがたくさんある。同じ本を繰り返し読んでもらうと「丸ごと知っている」という状態になって嬉しく安心なのだという。親は「これが好きなんだね」と気持ちを受け止めて読むといい。その本に満ち足りれば次の作品に関心が向くという。

また、繰り返し求める本が、感情を代弁している可能性もあるという。子どもは語彙が乏しいので、心のもやもやをうまく言葉にできないからだ。「この本になぜこだわるのかな、と思いを巡らせて」と助言する。

高橋さんは、絵本を学力アップの教材のように親がとらえがちなことを心配する。親はつい絵本から単語一つでも学び取ることを期待して「この絵は何かわかるかな」などと質問したくなる「子どもはドキッとして身構える。心の自由な動きが止まってしまう」と高橋さん。質問のデメリットも知ってほしいという。

「読み聞かせはスキンシップなのです」と強調し「疲れている時は、表紙を一緒に眺めるだけでもいい。同じ物を見つめる時間自体を味わってくださいね」と呼び掛ける。中国新聞（令和２年11月３日）掲載